

実栗郷土研究会報

No. 20

39. 10. 20

兵庫県実栗郡
山崎町教育委員会内
実栗郷土研究会
電 750番

和歌の三秀

安井俊二

山崎町の旧幕時代には、かなりの歌人がいて、幕末頃まで活潑に活動している。加納諸平編の「類題競玉集」は、長沢伴雄編の「鴨川集」と共に、類題歌集として代表的なものであるが、その第三編（天保七年刊）第四編の姓名録に、秋平、克彦、候通、鶴村、庵羅、久英、宗俊、雅綱、沾妙、暁清、本平、好孝と十二名の山崎歌人が登載され、秋元安民編の「類題青藍集」（安政六年）には、千世女、守城、有道、好孝、尙躬、尙之、知平、阿丘、秋平、美枝女、真門、清世、清載、須美女、御風、憲栄の十六名が出詠している。この実績をみても、いかに山崎に歌詠者が多くいたかがわかる。これら歌人のうちでも稲岡秋平、樽井守城、前野真門の三人を後世和歌の三秀と称えている。

大体、山崎町の和歌の史料で、一番古いのは八幡神社蔵の木村理平の「奉納四季五十首和歌」で、理平は屋号但馬

屋、稚号を公棟という以外は不明である。これは、宝暦十四年（一七六四年）の詠進だから丁度二百年前である。

最初の一首は、

出る日のきのふにかわる長閑さはそらより春や立かへ
るらむ（初春）

といった調子で、全部題がついて春夏秋冬恋雑旅などの順序に並べてある。

この時から七十年後の天保五年に、三秀の三人の年令を比較すると、秋平三十七才、真門二十四才、守城二十二才である。年令的にみて、秋平が先輩で、指導者の立場にあつたことがわかる。近年遺墨も中々見当らなくなり、その詠草集などは、名前だけ伝つて実物が発見出来ぬから残念であるが、折にふれて眼にとまつたものと類題歌集所載の歌で作品を知るより外ない。

稲岡秋平

寛政十年生、二十七才で医師として時の藩主本多忠敬に召出され士籍に入る。医術は、初め赤穂の入江先生、後京都の竹中先生に教えをうけた。和歌の外点茶を好んだという。父は治郎右エ門、阿丘と号して俳句をよくした。段の観音堂前の如水観の句碑は同人のもの。町の大年寄を勤めている。秋平は、諱を柳、字は章郷、藪北と号した。晩年椽園と称し、家集を「椽園詠草」という。播磨の国の和歌を集めて「巖潮集」と名付け出版する計画をたてながら、

業半ばにして萬延元年八月に六十三才で死去。秋平は、性謙虚で、長者の風格があつたと伝えられる。従つて、山崎歌人の中心人物であつたらう。

秋平の学統は、鈴の屋系で、本居大平の門人帳に播磨から、神吉弘範と二人記載されている。だから、大平の後継者加納諸平の雙玉集出版に当つて、大いに山崎地方から出詠を勧誘した筈である。随つて、歌は諸平の新古今に少し萬葉を加味した歌風を学んだとも言える。

秋ふかき片山おろし窓ふけばこのはにまじる村しぐれかな

ふるさとの一むら小はぎ咲きにけりここやむかしの露の袖がき

前野 真門

文化八年生、通称左兵衛、初め八木姓、真門は士分でも商家でもなかつたらしい。秋平の歌の中に「真門が宅のさまを」と題して

つくらはぬ心も見えて董草野をさながらの庭のけしきや

と、詠っているのをみても大凡の見当がつく。廃藩の際に、家祿六石を賜り、山崎藩民事属吏を拝命した由、近隣二十ヶ村の公文書の筆耕が業であつたとも伝えられている。歌風は、中々技巧がうまく上手な歌詠みである。詠草を集めて「柏園集」と名づけていたというが、現在まで所在

不明で見た者がない。明治九年六十六才歿。

鳴鳥のうきてはしづみしづみてはうきにいとまのなきみなりけり

人といふ人に待たれておしきれて咲きちるものはさくらなりけり

春秋の霞に霧にへだつれどなほしたしきは昔なりけり

樽井 守城

文化十年生、姫路より養子に來た人という。山鹿流の兵法師範、博学多才で、書画、謡曲に堪能、性格は明朗で交友範囲も広がつたらしい。名は九右エ門、箕谷と号し、晩年は九翁で通じた。明治十年六十五才歿。詠草の家集名は伝わつていない。

おとめ子のつばなぬく野のゆふつく日おもはぬかたにのころころかな
木の実はむ鳥がねさむきわがやどのそともよりこそ冬はきにけれ

シン機一式
菱菱編器具
三三電

尾崎シンシン

(旭町・TEL四六八) 商会



Ⅺ表 辰盆前 鋸押入用
(元文)

(一ノ谷山)

	量目	代銀	人夫	掛鉄	備考
吹炭	7291貫	1012.72			銀1匁=木炭7匁19匁
鉄砂	240駄	1089.60			1駄=30匁=銀4匁5分7厘
大工(註)2		0180.0		5.76	十分一銀
炭坂		0090.0		50.4	十分一銀
諸押(註)3		0072.0		4.32	+2斗88(夜食)
番子		1450.0	288人		+1.2(洗米)
械人(註)4				3.36	
てかじ(註)5		0180.0	54人		
鉄砂洗		0036.0	12人		
土ノ口(註)6		0109.7	47人		
キロ扱かつらとも		0007.0	13人		
用具代	大湯鍬	3本直し			0030.0
	小湯ゆり才	3本			0025.0
	新らすへ?	7ヶ			0077.0
	すみほり才	18厘			0004.0
	小鍬才	6厘			0006.0
	いほ折才	8厘			0012.0
小計		2329.26		4956	計算ママ
扶持米銀換算		2378.9		同上	一石銀48匁
総計①		25671.5			(文銀3,865匁72)
出来量	鋸12枚	一枚付213匁	9分3		(文銀330匁4.8厘弱)

鉄山は高賃銀で木炭代金が低額で済まされる点が特色と考えられる。

Ⅺ表の経費の割合と、砥波鍬の経費の關係は、Ⅻ表の通りで、一ノ谷

「千種屋手控帳」に「辰盆前一ノ谷山ニ而鋸押入用」及び「辰盆後鋸入用」として諸費用を記している。用語について、内容の判然としない点があるが、一応これに従つて表示してみる。(Ⅺ表参照)

B 鉄生産の経費について

宇野正 碓

実粟郡の近世産業 (四)

以上のようにして生産した鋸は

- 一、鋸さめ候節上鉄ハをち次第ニ番子共被来迄尤上鉄を尅貫目ニ付二分五厘ツツニ小屋へ受取申候
- 一、鋸折壺引込申節山子番子伝役ニ相勤申候
- 一、鋸さめ仕らへてかき出申節てニ大小八本番子伝役ニ仕来之事 右ノ鋸のけ申候節大き成かし二本入申候 是小屋よりきらせ申候(千種屋手控帳)

とある通り、鉋塊釜出には山子、番子の勞力奉仕によつており、冷却にはそのままの場合と戸外に引き出す場合の両様があつた如くである。

Ⅻ表

	一ノ谷鋸押(元文)	砥波鍬
鉄砂代	31.5%	30.1
木炭代	29.3	46.
扶持米代	18.	17.2
賃銀	12.7	
諸役費	6.1	5.0
用具代	0.4	

本多忠隣時代

馬揃上覧の記録

「此記録は、本多古文書の中樽井守城翁が筆写した参考御系伝五のうちより抜萃した。」

一、大猷院殿品川に於て馬揃と号し、御車の押前を上覧ありし例により、今度諸役人の馬揃を追々に見そなはずべき旨仰出されたり。かくて安政二年八月二十七日大番頭二組、百人一組、御持頭二組、火消役三組、先手九組、小十人頭三組の馬揃を吹上の御庭なる上覧所より、みそなわせ給んずる旨達ありしにより夫々の用意申付ぬ。

一、同月二十六日馬揃上覧により、祖先映世靈神の不時の祭をいとなみ、小書院床へ画像の一軸をかけ、燈明寺の法師を招き修法執行させ、忠隣拜礼終て供云付たる頭奉行を初め懸り樽井九右エ門まで拜礼いたさせ、神酒を吞せ其外馬脇小姓徒士の者へも拜礼申付ぬ。扱又馬揃上覧に、祖先伝来の中黒の旗、同伝来の大身の槍を持せ出馬なすにより、断書を認め同日目付中へ相達しぬ。

其調に云

拙者家元中務の大輔先祖吉左エ門忠豊儀、宇理城攻の節拝領致候扇の御指物を平八郎忠高中務の大輔忠勝迄相伝へ致候所、文祿年中扇之御指物は、御当家に於て御吉例之御験にも有之候間返上仕可き旨権現様の台命

郷土の文化と
知性の向上に
献身する店

書籍・雑誌・文房具

安井書店

本町通 TEL. (4) 700

を蒙り候に付奉差上候。其替の為中黒の御旗拝領致候由、拙者先祖出雲守忠朝監物政信以来も中黒の旗相用申候。尤是迄白地胴紺の内家紋付御旗雛形懸り大目付衆に達置候へ共此度は外成せず馬揃上覧の儀には御座候間、右中黒の旗相用申候。勿論伝来の品所持罷在候儀には候へ共、御品柄の儀故此段前以ては断申達置候。

八月二十六日

本多肥後守

鵜殿民部小輔様

一色邦之助様

岩瀬修理様

大久保右近将監様

今度馬揃 上覧の節御場所に於ては先祖より伝来の大身の槍持たせ申候此段は断り申達候以上

八月二十六日

本多肥後守

宛名右同人
同二十七日まだ夜深きに忠鄰熨斗勝昆布の肴にて酒三献くみて出宅なし、兼て公用方を遣し徒士目付より受取

らせ置し植溜の内なる陣小屋へ相詰たり。然るに東雲過る頃上覧所前にて一番貝を立たせ給うにより、受貝を立たせ着貝をなす。然るに目付中の見廻りあり、程なく二番貝を立させ給う。因て受貝を立させ捲太鼓を打て惣人数を小屋前へ畳たり。去程に前隊九鬼式部小輔隆都の人数に引続植溜の東木戸を出払い馬を止て相待しに、將軍家成らせ給いし御合図の掛り貝三声相立、捲太鼓を打立させ給うにより、前隊隆都の人数御場所へ押出しぬ。引続て忠邦が人数も植溜の西木戸の辺まで押詰相待しに、差引の同役遠山安芸守景高宣旨指図なすにより、序の太鼓を打たせ足並正しく御場所へ押出しぬ。行軍の次第

- 旗奉行 山岸安宅 添鉄砲足輕一人 旗 足輕二人
- 旗 旗差足輕三人 吹貫奉行 馬場多門 吹貫足輕
- 三人 檢士武者奉行 多賀宗太 貝 貝者三人 目付
- 樽井九右エ門 太鼓背負者一人 太鼓者二人 徒士頭
- 武間伊織 徒士鉄砲持拾人 使士遠藤般右エ門 拵梗

足許の美しさを一層目立てる可児のクツ
軽くて強く美しい可児の学童ゲツ

ゴム加工 履物一式 可児商店

東和通 電一六二



笠馬験持者二人、弓隊供頭公用方岡橋次郎兵エ、馬脇十人、口付二人、忠邦馬上、小姓四人、大身槍持一人、床机持一人、組頭指物金短冊宮重伝六郎、組頭指物梶の葉に銀のぼれん、大木市左エ門、番衆指物浅黄地に金の家紋須田新左エ門、番衆指物同上近藤惣右エ門、同上牧野左エ門以下四十四名

去る程に忠邦君前に於て、止れの糸帯をかけ太鼓をやめさせ、上覧所に向い一礼をなし、に、使番馬を早めて来り押行べきの上意を申達す。因て太鼓を打たせ次第のごとく行軍となりて、陣小屋へかへりたり。さて目付の案内により吹上の御庭芝の御陣小屋前へ出しに、老中の取合にてありがたき上意を蒙り、赤飯に煎茶酒をも給りけれ。

東播地方の見学旅行

安井記

五月二十日、夜来の雨も止みて曇つた空、初秋にしては暖かく、旅行にはあつらい向の天候である。参加人員百五十名が観光バス三台に分乗して山崎発車は六時四十分、安志、四辻を経て福崎へ着く。町はずれに下車して「妙徳山神積寺」へ上る。藤原時代の代表作と称せられる、薬師如来を秘仏とする寺で、山の中腹にあつて数々の古碑が残り境内に美術の石塔もあつて異彩を放つている。住職の懇篤な説明を受けて下山し、道を急いで北条町へ行き、近年特

『五百羅漢石仏』を見る。彫刻は精巧とは言えぬが現在四百八体の像が残つて居るのも珍らしい。素朴の中に何か引きつけるものがあつた。新しく新築された羅漢堂が清く美しく番する人も居られて、見学者も絶えぬとの話しであつた。近くにある住吉神社、酒見寺へも参拝してから車は一路西脇市へ直行した。西脇は東播一の工業市で、その中で特に現代新式の工場である。

『播州紡績会社』を見学した。会社幹部の方々の好意ある案内と説明に、整備せられた新時代の大工場を巡覧させてもらい、一同は驚きと感激とであつた。かくて車を戻して滝野へ、

『闘龍灘と日光園ヘルスセンター』に着く。累々たる奇岩の中を滝の如く落つる白い水、碧波淵となつて流るゝ青い水、それにあちこちと連絡の橋もあつて景観は申し分がない。ここで記念撮影をした。日光園は山の中腹にあつて本年三月開園した新装の娯楽殿堂で、娯楽室、大広間、大浴場など完備して居て眺望も又絶景である。ここにてゆつくり休憩、昼飯、余興を見て満足した。三時前にここを発車して小野町に向い

『浄土寺』に着く。寺は重源上人により七百五十年前に創建せられた寺で、国宝も多い。此日は住職自らの説明で浄土堂円陣を開扉して頂き拝観できた。堂は円柱状の虹梁式で宝蔵造となつて、四方の軒先から組上つてくる屋根裏

秋の夜長にテレビ
寒に備えて暖房器
サビスはお任せ下さい

サンヨー電化製器専門
石野電器商会

福原町
電五九九



は化粧仕上げで、天井は張っていない。快慶作の三尊仏は金色さんとして輝き堂内全部の朱塗に映えて、藤原時代優雅の名作はほんとうに有難く、香気と気品のたゞよう嬉しい気持になり、かくて境内巡覧の上、車は加古川市へ出て姫路に戻り、更に

『手柄山公園』に登り車中より市内の大夜景を下瞰して、あつと喜びの声を揚げた。山崎帰着は七時三十分

会 員 名 簿

- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| 本 町・高島 寅一 | 門前・長尾 修子 | 三 津・田中新治郎 |
| 〃 大谷 彰彦 | 〃 福井すかゑ | 〃 下川 辰治 |
| 北魚町・湊 敏子 | 〃 井上芳之助 | 一宮町・大谷 信哉 |
| 鴻ノ町・三渡勝二郎 | 中 井・立花 七平 | 〃 八木 醇 |
| 庄 能・中村みつゑ | 御 名・永峰 朝吉 | 〃 阿房ふさの |
| 今 宿・松田 治一 | 三 津・北川 きの | |

見学旅行メモ

(昭和33年～39年)

年	月	日	行	先
33年	5月	11日	安志開善寺・今念寺・加茂神社・光久寺	
33年	6月	8日	播磨国分寺・鶴林寺・尾上神社・須磨寺	
34年	5月	24日	北条・滝野・小野・一乗寺	
34年	11月	1日	伊和神社・音水・赤西・ダム	
35年	5月	22日	佐用・津山	
35年	9月	25日	赤穂・室津	
36年	5月	21日	石宝殿・鶴林寺・太山寺・人丸神社	
36年	9月	24日	岡山・西大寺・後樂園・高松稲荷	
36年	11月	5日	三河・千種・船越	
37年	5月	20日	神戸市・有馬・東条ダム	
37年	9月	23日	鳥取砂丘・温泉・引原ダム	
37年	11月	11日	安志谷・関・鹿ヶ壺	
38年	5月	12日	尾道・鞆	
38年	9月	22日	伊丹・宝塚・清荒神・中山寺	
39年	5月	24日	宇治・伏見	
39年	9月	20日	福崎・北条・滝野・西脇・小野	

關齋關係

本多忠可と心学(上)	島田 清	3	—
〃 (中)	〃	8	—
〃 (下)	〃	11	—
池田政元の臨終(一)	小林 楓村	16	—
赤穂郡内旧安志領の現状	〃	5	—
安志藩略記	〃	15	二
小笠原氏系譜	〃	15	九
安志藩石高表	〃	15	十
馬揃上覧の記録(忠)	〃	20	四
旧藩の写生図	堀口 春夫	3	七
山崎町に還つた關齋像	和田 疎人	9	—
山崎關齋の学問(一)	阿部 吉雄	13	—
〃 (二)	〃	14	—
山崎關齋の学統について	中谷 康郎	14	四
「山崎關齋の学問」についてのお断り	〃	15	八
山崎 家 譜	〃	13	七
今津藩と關齋	〃	13	七
關齋著作目録	〃	13	十一
關齋儒学系譜	〃	13	十五
山崎關齋神社の創建	〃	13	十二

伝説。民謡。随想

祖考の碑々陰記	入江 静夫	13	—
關齋先生二百八十年祭	〃	13	—
建碑二基の除幕式	〃	13	—
山崎關齋奉賛会の新発足	〃	13	—
歌の風土記	栗山 宗知	16	—
往古の郷土	〃	2	—
河東の伝説(一)	〃	3	—
〃 (二)	〃	5	—
〃 (三)	〃	5	—
天保ききん小話	下村慶之助	7	—
お地藏様の縁起	赤松 円琳	5	—
平瀬清正の手亡塚	北 彌太郎	5	—
馬竹の奇談	安井 俊二	7	—
三番目の銅鐸	福井 訖次	9	—
道標立石に讃す	〃	8	—
唯一癖の趣味	〃	10	—
寄せ一屋本	〃	12	—
衣坂異聞	島下八重子	16	—
系	堀口 春夫	17	—
真説「夜泣石」	〃	18	—

わらべ歌？
初詣

神。仏関係

伊和神社
明源寺考 (一)

□ 〇

弁円の父

播磨の公弁円伝私考

興国寺と木庵禪師

教信上人の墓と千草念仏の由来

弁円の墓 (上)

(下)

蒼龍稻荷神社靈驗記

「安志姫」雑考

祭典案内

美国神社春季祭典

歌。俳関係

四庵庵素練 (一)

安井竹軒

18 11
4 10

安黒義郎
杉山義昭

1 6
3 4

〃 〃 〃 〃 〃

9 6 5 6 5

〃 〃

12 9

〃 〃

16 6

赤松円琳

3 8

〃 〃

6 7

春名荒太郎

3 8

中村潔

10 5

〃 〃

5 10

〃 〃

19 6

〃 〃

5 10

島田清

2 1

安栗俳壇の回顧
本多家の俳人
霜柿軒の辞
榎元の糸桜を見て
川田順氏より短歌
川田順歌碑のこと
懐古こぼれ話
和歌の三秀

安井竹軒
小森年足
樽井貞彪
安井俊二
安井寅一
安井俊二

15 11 7 12 10 7 7 20 7 12 10 7 7 11 15
12 10 9 7 7 19 7 11 12 10 9 7 7 11 15

資料

郷土資料解説 (一)

安井俊二

1 6

(二)

〃

2 7

(三)

〃

3 10

(四)

〃

4 11

(五)

〃

6 10

(六)

〃

7 10

(七)

〃

10 10

(八)

〃

16 13

天明年間の山崎要覧

史料採訪報告

殿様藪古墳調査報告書

岸田発掘古銭報告

宇野正碓
山高地歴班

2 5 16 10 7 6 4 3 2 1
10 1 2 5 16 10 7 6 4 3 2 1
7 5 2 13 10 10 11 10 10 7 7 11 15

